

大東文化大学 東洋研究所所報

2019.1 No.70

目次

巻頭言 岡崎 邦彦……………1	第2回講座概要 小林 敏男……………2
公開講座「アジアの民族と文化」	第3回講座概要 田中 良明……………3
第1回講座概要 佐藤 志乃……………2	東洋研究所の理念・目的……………4

日中平和友好条約 40 年—中国見聞記区

岡崎 邦彦

1978年10月、鄧小平が日中平和友好条約の批准書交換のために来日し、条約が発効されてから2018年で40年を迎えた。さらに1979年に中国から要請された日本政府開発援助（ODA）は、2007年に有償資金協力を終えていたものの、その後も無償資金協力、技術協力などが続けられ、最終的にODAの総額は3兆6500億円余りになった。これが2018年をもって新規採択が終了となった。

ところで、1972年日中国交回復後、6年も費やしてようやく1978年に日中平和友好条約が締結されたのはなぜか。それは、中国側が求める（ソ連に向けられた）「反覇権条項」を条約中に入れるかどうかで、交渉が難航していたからだが、これについて中国側が態度を軟化させ（条約は「第三国との関係に関する各締結国の立場に影響を及ぼすものではない」として「第三国条項」を入れ）たことで合意に達したからである。それでは、中国側がこの時期に態度を軟化させた背景には何があるのか。この時、毛沢東路線を継承する華国鋒から反文革の鄧小平へと権力内部で鄧小平が優位に立ち、しかも80年代に鄧小平が掲げた改革開放路線を支援する巨額の日本ODA資金援助が供与されたことを見れば、この日中平和友好条約締結時期に中国の政治と外交が大きく変わりつつあったことを推察することができよう。

中国政治の変化、政権交代が日中関係に大きな影響を与えてきたことは、すでに知られているところである。中国政治が日中関係に影響した例として、私の見るところ1958年中国の大躍進期に日中の民間貿易と交流が停止した事件がある。きっかけは、岸首相の反中国態度、長崎のデパートで

中国物産会場に掲げられた中国国旗が引きずり降ろされた事件、さらに漁業問題などが挙げられていたが、中国国内では大躍進政策が採られ対外依存から自立が求められ、さらに政策面で周恩来首相が毛沢東に批判されたことで、対日外交政策決定における立場、兼務していた外相の地位から一時的に外されていたのであった。これが日中関係に影響したと見ている。また1960年代半ばからのプロレタリア文化大革命時期も日本との貿易、人的交流が制約されていた。そして、日中間に重大な影響を与えたのが1987年胡耀邦総書記の失脚時で、日本との交流が胡耀邦引き下ろしの一因とされたことである。このことで日本に対する譲歩や弱気と見られる外交姿勢は、採れなくなった。江沢民の対日強硬外交もそうした一面があった。胡錦濤が政権について対日関係改善へ動き出すと国内から批判が起こり、さらに日中平和友好条約30年の年に東シナ海ガス田の日中共同開発で合意したものの、党内の反対にあっけいまだに実行されていない。これは2010年の尖閣諸島沖漁船衝突事件後の反日デモと同様、江沢民派閥、保守強硬派らが胡錦濤・温家宝政権を揺さぶり、党内権力闘争に利用したからであった。

しかし現在、権力闘争に勝利し安定した習近平政権にあって、日中関係は平和友好条約40年を迎えるなか徐々に対立から、協調へと動き出している。ただ、われわれが心掛けるべきは中国の軍拡に対する監視であり、歴史認識問題という「緊箍咒」（きんこじ）であるが、またいつまでも中国にとって都合のいいお人好しの隣人であってはならないことである。（東洋研究所教授）

公開講座「アジアの民族と文化」

2018年度（第34回）東洋研究所公開講座は、「アジアの民族と文化」を統一テーマに下記の通り開催された。受講者総数は延べ133名で、各講座の概要は以下のとおりである。

なお、長年ご出席いただいた方に対して行っている表彰状の授与は、今年は1名の該当者がいた。

◇第1回 11月8日（木）13:00～15:00 大東文化会館3階 K-0302 研修室

テーマ：日本画の巨匠～横山大観と東洋思想～

講師：佐藤 志乃氏（東洋研究所兼任研究員）

今年は横山大観の生誕150周年にあたり、多くのメディアがこれを取り上げた。東京国立近代美術館と京都国立近代美術館で開かれた大回顧展は、入場者があわせて30万に届く盛況ぶりであり、まさに大観の国民的な人気を再認識させられる年となったわけである。

さて、このたび「アジアの民族と文化」というテーマで講座を行うにあたり、「東洋思想」と大観の関係について考えてみることにした。大観について、一般鑑賞者の多くは、富士山をたくさん描いた画家という印象を持っている。あるいは桜や紅葉といった日本の作品を思い浮かべる人も少なくないだろう。また表現については、日本絵画に革新をもたらした近代化させた、と思う人が多いのではないかと。そして「近代化」については、旧弊を打破し西洋からの新しい知識を積極的に受容すること、すなわち西洋化のことであり、多くの人が思っているのではないだろうか。

ただし一方で、明治という時代が、江戸から続く時代であることを考えなければならぬだろう。近代国家の形成を担った多くは、江戸幕末を生きた人たちであった。大観は明治元年生まれだが、父は水戸藩士つまり武士だ。大観は幼少期より、この父から士族的な意識を受け継いでいる。このことから今回の講座では、大観がどれだけ伝統的な意識、東洋的な精神を残していったのか、という点に目を向けた。

大観の画業を見渡すと、仏教思想をテーマとした「寂靜」「無我」「生々流転」、中国の歴史に取材した「屈原」「風蕭々兮易水寒」、荘子を取り上げた「游刃有余地」を



はじめ「寒山拾得」「達摩」「虎溪三笑」「前赤壁」「後赤壁」「帰去来」など、東洋的な作品が多い。インドや中国の旅行体験を通じてその表現には新しい時代の息吹が吹き込まれたが、江戸期より引き継がれた東洋思想の素養が、明治の知識人たちの精神を支えるものとして残っていたことを、これらの作品は示している。また表現において大観は、余白や省略がもたらす美と想像の世界、そして水墨表現がもつ暗示性を、西洋画を凌ぐ東洋（日本）絵画の特徴とした。

過去に遡って古典を研究し直し、その中から新たな価値を発見し、あるいは再解釈を試みる。伝統と歴史から何を掬いとり残すのか、という課題と挑戦は、日本の近代化を支えた重要な側面である。特に大観のように西洋化の波に対峙し「日本画」を創ろうとした側にとっては、その意義深さはなおのことであった。

◇第2回 11月15日（木）13:00～15:00 大東文化会館3階 K-0302 研修室

テーマ：元号～その歴史と今～

講師：小林 敏男氏（東洋研究所兼任研究員・大東文化大学名誉教授）

I 一世一元の制の発足

1. 明治時代の定制
2. 旧皇室典範（1889年、明治22年）
3. 登極令（1909年、明治42年）

II 戦後の元号問題

1. 「昭和」年号の存続問題
2. 元号法の制定と憲法論議
3. 元号論争

III 平成から新年号へ

1. 昭和から平成へ

2. 平成年号の誕生
3. 生前退位と新年号

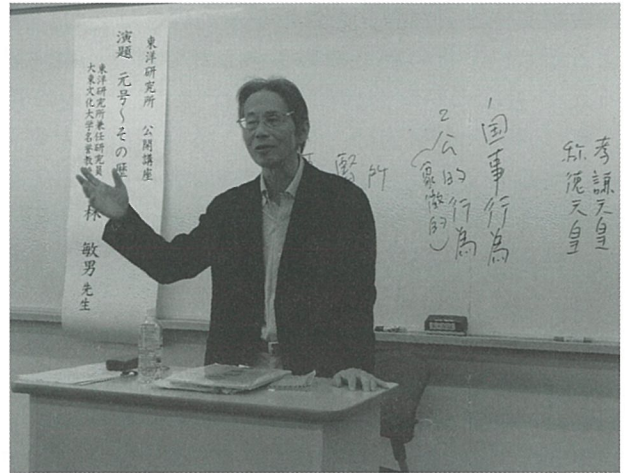
平成の現天皇が来年（2019年、平成31年）の4月30日に退位され、5月1日には皇嗣の皇太子が即位され、新しい元号に改元される。こうした事情をうけて、本講座では、近代明治以降の元号の歴史事情と考えてみた。

近代（明治）になって、中国の明王朝以降と同じく、我が国でも一世一元の制（一人の天皇の在位期間に一年号のみ、即ち即位改元のみ認める）が始まった。前近代においては、祥瑞改元や災異改元、革年改元（辛酉革命説、甲子革命説にもとづく改元）があり、一人の天皇が

複数の年号ともつのが一般的であった。そして、明治以降、この年号が崩御された天皇の諡号（おくり名）として献呈されて明治・大正・昭和天皇と呼称するようになった。

戦前の天皇主権の明治憲法下においては、「元号は詔書を以てこれを公布する」（登極令3条）にあるように天皇が主体的に元号を決定する元号大権ともいべき権限をもっていた。

戦後、元号は天皇の権威と結びつくもので民主化にふさわしくないという意向もあって、戦前の皇室典範から元号の法的根拠は削除された。しかし、1979（昭和54）年に「元号法」が制定され、元号制定の法的根拠はよみがえった。ただし、元号は政令で定められるようになって、天皇のもとをはなれた。したがって、平成元号は、それ以前の明治・大正・昭和の年号と違い、新憲法の国民主権のもとで内閣が主体的に制定したものとなった。来年の新年号も平成の年号と同じように制定されるものの、それは天皇の退位にともなうものであって、「皇室



典範」4条の終身天皇制を特例法にもとづいて変更しての皇嗣（皇太子）の即位によるものである。その意味で来年の新年号の出現は、現代社会の一つの縮図を表現したものであると考えている。

◇第3回 11月22日（木）13:00～15:00 大東文化会館3階 K-0302 研修室

テーマ：中国の虹～そもそも虹なのか～

講師：田中 良明氏（東洋研究所専任研究員・東洋研究所准教授）

我々日本人が中国古典を読み解く上で、単純かつ最も重要な問題として、その漢字の示す意味は、我々はその漢字に対して認識するものと同じであるか、ということが挙げられる。本講ではまず、「鮎」（アユ・ナマズ）や「手紙」（レター・トイレットペーパー）といった現代中国語にも見られる漢字に対する認識の差を例に、誤解が生まれやすいことを説明した。ついで、中国古典に見える「虹」を確認する前に、そもそも我々は何を「虹」と認識しているのか、一般的知識によって認識される「虹」と、大気光学現象として定義される「虹」の種類、また、屈折や回折によって「虹色」に見える光学現象などについて、資料画像を見ながら簡単な解説を行った。

その上で、日本人が「にじ」と読む「虹」「霓」「霓」に関する文字的な説明をした。特に「虹」字については、最古の漢字である甲骨文字では、双頭の何かしらの象形文字であり、黄河で水を飲む存在であり、この「双頭」で「水を飲む」という「虹」への認識は、後世にも引き継がれていくことになる。しかし、春秋戦国時代の文献に見える「虹」はいずれも自然現象であり、太陽の反対側に出現する日衝の虹か、太陽周辺に出現する光学現象である日傍の気を指している。ただし、『詩経』の蟬蛸に記された東の空に出現する「虹」は、儒家の災異説などが影響し、夫婦の儀礼や倫理を象徴する天の戒めとして認識され、その結果、後漢の靈帝期に出現した蠢く黒い気についても、蔡邕や楊賜によって後宮での寵愛の偏向を諫めるために、『詩経』の蟬蛸と同じ「虹」であると認識される。こうした資料から、何が「虹」と認識されるかは説者の目的に左右されることを説明した。また、始皇帝暗殺未遂事件で有名な荊軻の故事に現れる「白虹貫日」についても、災異説の流行と共に、その意味する



所と故事の内容が変わっていく様子も紹介した。とはいえ、「虹」はつねにそうした認識のみによって扱われるわけではなく、自然現象として出現する「虹」については、儒家の経典の一つである『礼記』の月令篇に記されており、蔡邕もまた、それに注して自然現象としての「虹」に対する考察を行っている。

これらの例から、中国の古典知識の中には「虹」に対する認識が多重的に共存していることを確認した。また、以上の内容は儒家思想の文献に資料的な偏りがあるため、最後に小説類から「虹」に関する資料（死んだ夫婦が虹になる話、釜に首を突っ込んで水と酒を飲んだ虹が黄金を吐いた話、谷間に出現した虹を観察した北宋の沈括が「虹が水を飲むというのは真実だ」と実感した話、白虹の精が老婆になって現れた話）を紹介し、「虹」への認識がなおも複雑に展開していく一端を示した。

東洋研究所の理念と目的

大東文化協会が設立された基本的理念は、(1) 漢学を中心とする東洋学術の研究、(2) 東西文化の融合による新しい文化の創造をめざすことであり、東洋研究所はその理念を実現するために、「アジアを中心とする人文・社会の科学的調査研究を行い、広く学術の発達に寄与すること」を目的とし、研究活動を行っている。

東洋研究所の目的は、学則第5条に基づく大東文化大学東洋研究所規定によって定められ、「アジアを中心とする人文・社会の科学的調査研究を行い、広く学術の発達に寄与すること。」とされている。当初研究局第一部人文科学系と第二部社会科学系の2組織がおかれ、その後専任研究員の就任に伴い人文科学班、政治・経済班、国際関係班の3班に分かれての研究活動に入った。時代の要請に従い個人研究はもとより、学際的・総合的共同研究の重要性を強調し、学際的メンバーによる研究部会を設け、研究成果を学術雑誌『東洋研究』に掲載するとともに、刊行物を発行し世に成果を問うている。また、研究成果を地域社会への還元として公開講座を開催し、国際交流の一環として、外国人講師による講演会等学術の発達に寄与することを目的に活動している。

※ 研究所の理念、目的に関して、以前は「アジアを中心とする人文・社会・自然の科学的調査研究」を実行することであったが、今年度8月より「自然」を調査研究の対象から削除した。

2018年度 東洋研究所刊行物

- ・「東洋研究」 208号 (2018年9月25日発行)
209号 (2018年11月25日発行)
210号 (2018年12月25日発行)
211号 (2019年1月発行予定)
- ・「藝文類聚」巻四十七 訓讀付索引 (東洋研究所研究班 2019年2月発行予定)
- ・「茶譜」巻十一 (東洋研究所研究班 2019年2月発行予定)
- ・「『天文要録』の考察」〔三〕 (東洋研究所研究班 2019年2月発行予定)

刊行物の詳細については、東洋研究所ホームページをご覧ください。

刊行図書取扱店

■(有)池上書店

〒175-8571 板橋区高島平 1-9-1 大東文化大学 2号館 B1
TEL: 03-3932-7567 FAX: 03-3932-7544
E-mail: ike-book@smail.plala.or.jp

■汲古書院

〒102-0072 千代田区飯田橋 2-5-4
TEL: 03-3265-9764 FAX: 03-3222-1845
E-mail: kyuko@fancy.ocn.ne.jp

■大東文化大学内購買部(株)進明堂書店

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿 560
TEL: 0493-34-4430 FAX: 0493-34-5622
E-mail: info-daigakuten@shinmeido.co.jp

■東方書店業務センター

〒175-0082 板橋区高島平 1-10-2
TEL: 03-3937-0300 FAX: 03-3937-0955
E-mail: tokyo@toho-shoten.co.jp

大東文化大学 東洋研究所 所報 No.70

2019年1月25日発行

印刷: (株)東京技術協会

編集・発行 大東文化大学東洋研究所

〒175-0083 東京都板橋区徳丸 2-19-10

TEL 03-5399-7351 FAX 03-5399-8756

E-mail: tokenji@ic.daito.ac.jp

URL <http://www.daito.ac.jp>